

【ねがいましては】

平成20年2月25日

KYOWA SCHOOL

第208号

「伴走」

2月17日(日)、東京がマラソンランナーで埋めつくされた日の翌日午前中は、どこの民放局でも3万2千人のそれぞれの42.195kmを報道していました。その中のひとつ、全盲の方の完走を見たとき、伴走の方の姿に私の心は釘づけになりました。

「あと20mで〇〇、3・2・1、ハイッ……。」

主役である全盲の方の一呼吸一呼吸を敏感に感じ取り、一秒の狂いもなく合わせる。たった一本のタスキに全神経が乗り移ります。まるで心が完全にコピーされたかのように併走します。伴走の方の中にあるものは、今この瞬間がベストであってほしい。完走できるかなどどうでもいい、今この瞬間が、この全盲の方にとって最も心地よい走りができればいい。その気持ちが掛け声とともに私の中に入るのを感じました。

これだ、教育もこれなんだ。私は強く重なるものを感じました。先生と呼ばれるもののあり方を感じました。同時にお母さんやお父さん、ご家族の皆さんのあり方でもあるなど感じました。

伴走者が先生なら、全盲の方は生徒。伴走者がお母さんなら、全盲の方は我が子。伴走者が妻なら、全盲の方は夫。その逆もありえますが……。

全盲の方の心の中は、安心で包まれているはず。伴走の方の心は安心して走っているなという充実感があります。この瞬間、ふたりとも幸せを感じているはず。「ありがとう。」「役に立ててうれしいよ。」という気持ちのキャッチボールをしています。

学校へ場を変えます。「先生ありがとう。」「君がうれしそうにしてくれることにありがとうね。」

家庭に場を変えます。「お母さんありがとう。」「いいのよ、お母さんとしてあたりまえでしょ。」

夫婦へ場を変えます。「……。」「……。」(ちょっと想像つきません。)

人と人が距離を近くしたとき、必要なものは『安心感』だということがわかります。今の教育現場、今の家庭、結びつく割合が少ないように思えてしまいます。

なぜ……『欲』が原因かなと思うのです。となりの人に求めてしまう。やがてこれが苛立ちを誕生させ、安心感を消滅させる。

学校 → 先生が「今度こそ私のクラスが学年でトップになるように指導しなきゃ。」しかし以前と変わらず相変わらずの光景で過ごす生徒たち……。「なぜ、なぜ私がこんなにがんばっているのに……。」先生の表情は険しくなり怒り始める。

家庭 → お母さんが「今度こそ、この地域でも一番と言っていぐらいに授業料の高い塾へ行かせたのだから成績上がるでしょう。」しかし当の子は、相変わらずののんびりムード。「なぜ、なぜ私がこんなにパートまでして授業料稼いでいるのに……。」お母さんの表情は……ご想像におまかせします。

『欲』がなければ、このように心は離れなくてすんだかもしれません。

毎日の生活の中で間違いなく必要な『安心感』。いつでも伴走者のいてくれる空間。そのような環境の中で、自分の目標に向かって一途に歩くことができれば……。

先日、小学生たちのクラスるとき、ある質問をしました。「今の学校の自分のクラスの中に、この子なら信じられる、信用できる、そんな子が何人いるか数えてみてくれない?……5人以上の人、4人、3人、2人、ひとり、いない人……。」

「いない」とこたえた子がいたのです。裏返せば「誰も信用できない。」ということです。「いない」で手を上げるには勇気が必要だったでしょう。言葉にできない訴えたい何かがあるのでしょう。「なんだこの世の中は……。」「ぼくは、私はひとりぼっちなんだ……。」ことばを多く知らない子どもたちは、毎日毎日形容できないストレスを感じながら過ごしていることでしょう。

夜、中学生のクラスになり、そのことを話しました。同様に同じ質問をしました。「いない」はいませんでした、「ひとり」に手を上げた子が多いように感じました。そして次の質問をしてみました。「担任の先生を信用している人。」「……少ないのです。「ここにいる栗田を信用している人。」「……はい、はい、はい、ハイ。」「うるさいよおまえは……。」ありがとうね中学生諸君。

ありがとうねみんな。しっかり伴走するからね。ここに通う子たち全員のとなりに、いつでも栗田は伴走者としていよ。今が精一杯ならいいよ。まちがえても、それが精一杯ならそれでいい。勝ったとか負けたとか、相手がいたからこそ、勝ったり負けたりできたんだ。相手に感謝しようよ。……ありがとう。

安心して勉強ができる場所、安心して間違えることができる場所、安心して思う存分質問ができる場所。

ここが第二の古里だによって感じてもらえるよう、これからも伴走させていただきます。ありがとうね。